



「みんなきょうだいのよう育つたよ」と話す吉住さん 河浦町出身の小松さんですが、もうすっかり新川の住人



上／移住してきたばかりの小見田さん一家。左から妻の麻理亞さん、一人娘の星藍さん、秀博さん。下／小見田家の庭から望できる、飯田山と船野山

「新川は買物が不便だと水害も心配されますが、ここに嫁いで50年。皆さんの方ばかりで、『住めば都』とはこのこと」と話す須磨さんは宇土市で生まれ育ちました。小学生のころのこと。須磨さんの母親の実家がある御船町を訪れる際、宇土からかつての辛島公園前でバスに乗り換え、益城を経由して向かうのが当時の公共交通の手段でした。そのバスの乗降休憩所が新川。山川の樋門の近くで、男の子たちが水遊びをしていたのを覚えていました。

須磨さんが描いた庭に咲く「ヤブコウジ」のハガキ絵 濡物が得意という妻の須磨さん 新川を道案内してくれた龍治さん

踊りが奉納されます。「新川に来てすぐには、皆さんのが砥川獅子舞の仲間に迎え入れてくれて。それが何よりうれしかったですね。以来、ずっと参加させてもらっています」と笑顔を見せます。

集落の結束を物語るエピソードも飛び出します。「もう何十年も前のことをばつてんね」と前置きして話し始めたのは吉住齋龜さん。それは、町の体協主催のソフトボール大会に新川で参加していたころの話。

当時、選りぬきのメンバーで結成された地域もあったようですが、圧倒的に人数が足りなかつた新川では、上は50代から下は10代という幅広い年齢の9人がどうにかそろつたそうです。「補欠もおらん、でこぼ

こチームですたい。ばつてん、新川のみでチームを張れたことがみんなうれしくてね。試合の成績? そりや、聞かんではいよ」と吉住さんが言うと、どつと笑いが起きました。

集まつた人たちの中に、昨年12月秀博さんがいました。熊本市東区から家族で移住したという小見田さんが、縁ゆかりもないこの地に住まいを構えた理由は、自宅から一望で見える飯田山と船野山の風景にあります。よろしくお願ひします」とい

木山川、藻川、岩戸川が交わる場所にたたずむ集落「新川」。砥川地区でありながらも、古くから新川としての集合体を形成している地域です。現在12戸が暮らし、ここには昔

喜怒哀楽を 共に生きる



上／高台の堤防から眺めた新川集落。下／区長の松永さん宅に集まつた集落の皆さん

から温かいコミュニティが育まれてきました。

「なんかあつたらすぐに駆けつけて、うれしいこともつらいことも共有してきた、みんなが親戚のようなんです」と話すのは、区長の松永修一さんです。10年前の熊本地震直後は、集落で協力し合つての自主避難。堤防近くの空き地に各家の車を集め、車中泊をしながら、ビニールハウスに食材を持ち寄り集めて車中泊をしながら、ビニールハウスに食材を取りました。倒壊した家では、敷地内の納屋や倉庫を仮住まいとして暮らすに食事を取りました。調理し、皆さん一緒に食事を取りました。自宅が全壊した松

から温かいコミュニティが育まれてきました。

「なんかあつたらすぐに駆けつけて、うれしいこともつらいことも共有してきた、みんなが親戚のようなんです」と話すのは、区長の松永修一さんです。10年前の熊本地震直後は、集落で協力し合つての自主避難。堤防近くの空き地に各家の車を集め、車中泊をしながら、ビニールハウスに食材を持ち寄り集めて車中泊をしながら、ビニールハウスに食材を取りました。倒壊した家では、敷地内の納屋や倉庫を仮住まいとして暮らすに食事を取りました。調理し、皆さんと一緒に食事を取りました。自宅が全壊した松



vol.56
しんかわ
新川 編



永さんは「どの家にも地下水が湧き出でおり米もある。食材は各家の家庭菜園でまかなつて。みんながいるから、こがんときもどうにかなる」と思えたからですね」と振り返ります。

その日、松永さんの家には集落の人たちが顔を出していました。「なんさま『わがまち散歩が来る』て言ふもんだけん」と誰かの一声でのつづから明るいムード。公民館がない新川では、地域の寄り合いは区長宅に集まるのが慣例だそうです。



「新川は一丸となって『わがまち散歩』に参加しまーす」と言ってくれた松永さん

松永さん宅に集まつた顔ぶれは、これから明るいムード。公民館がない新川では、地域の寄り合いは区長宅に集まるのが慣例だそうです。

「子どものころから祭りが大好き」という、天草の河浦町出身で30年前に妻の実家があつた新川に移住した小松政徳さん。小松さんの古里では「海を渡る祭礼」と呼ばれる産島神社の豊漁を祈願する祭りが有名。無人島の産島に船でご神体を運び、砥川の獅子舞と同じく、獅子舞や太鼓



どの家にも地下水が湧き出でおり、地震直後はこの地下水に助けられました

集落の結束を物語る いくつものエピソード

幼いころの新川との 不思議なご縁

う自己紹介にたちまち皆さんのが食いつきます。「俺も海釣り派」「自分も」「俺も俺も」と次々に手が上がり、小見田さんと皆さんはすぐに打ち解けました。どうやら新川にまた一人、熱心な釣り仲間が増えたようです。

「子どもたちから祭りが大好き」という、天草の河浦町出身で30年前に妻の実家があつた新川に移住した小松政徳さん。小松さんの古里では「海を渡る祭礼」と呼ばれる産島神社の豊漁を祈願する祭りが有名。無人島の産島に船でご神体を運び、砥川の獅子舞と同じく、獅子舞や太鼓

マキの剪定が見事な庭を見つけました。サラリーマンを定年後、親戚の庭仕事を手伝つているという木本龍治さんが手掛ける自宅の庭には、四季折々の植物も育つています。妻の須磨さんは、庭に訪れる小鳥や草花をモチーフにしたハガキ絵を描くのが楽しみだそうです。

「新川は買物が不便だと水害も心配されますが、ここに嫁いで50年。皆さんの方ばかりで、『住めば都』とはこのこと」と話す須磨さんは宇土市で生まれ育ちました。小学生のころのこと。須磨さんの母親の実家がある御船町を訪れる際、宇土からかつての辛島公園前でバスに乗り換え、益城を経由して向かうのが当時の公共交通の手段でした。そのバスの乗降休憩所が新川。山川の樋門の近くで、男の子たちが

す。もしかしたらその中に夫がいたかもしません。ここに嫁ぐことになつたとき、不思議なご縁を感じましたね」と話してくれました。

須磨さんが描いた庭に咲く「ヤブコウジ」のハガキ絵 濡物が得意という妻の須磨さん 新川を道案内してくれた龍治さん

マキの美しい生け垣と、見事な剪定ぶり。圧巻です



「みんなきょうだいのよう育つたよ」と話す吉住さん



上／移住してきたばかりの小見田さん一家。左から妻の麻理亞さん、一人娘の星藍さん、秀博さん。下／小見田家の庭から望できる、飯田山と船野山

「新川は買物が不便だと水害も心配されますが、ここに嫁いで50年。皆さんの方ばかりで、『住めば都』とはこのこと」と話す須磨さんは宇土市で生まれ育ちました。小学生のころのこと。須磨さんの母親の実家がある御船町を訪れる際、宇土からかつての辛島公園前でバスに乗り換え、益城を経由して向かうのが当時の公共交通の手段でした。そのバスの乗降休憩所が新川。山川の樋門の近くで、男の子たちが

水遊びをしていたのを覚えていました。そのバスの乗降休憩所が新川。山川の樋門の近くで、男の子たちがバスに乗り換え、益城を経由して向かうのが当時の公共交通の手段でした。そのバスの乗降休憩所が新川。山川の樋門の近くで、男の子たちが